

“次期総裁”にのしあがった 保守本流の巨象

対談者 経営評論家・三鬼 陽之助

宏池会会長になったばかり、まだ一般には総理総
裁候補とは認知されていない頃の対談で、田中角
栄論、国民が望む目標達成型、米中問題などが縦
横に論じられている。三鬼氏は「財界御意見番」
として知られる。

買い出動？ 有望 “大平株”

三鬼 この対談で田中角栄さんとやったことがあるんですよ。そのときに “大平君は総理になる”
っていうことを、田中角栄さんがしゃべってるんですがね。お読みになったですか。

大平 いやあ、まだ読んでないです。

三鬼 「大平君はいつの日か必ず総理になる。非常に勉強している。にせものでない。ほんもので
す。このほんものが、ほんものどおりに評価されないはずはない」ということを田中さんがいわれた
んですよ。まあ、必ずなれるかどうかはわからんですけど、株でいえば、大平株というのは、非常
な有望株ということになるんですね。

大平 （かすかに笑い、手を組みなおして）そうですね。

三鬼 単刀直入に聞きますが、田中さんとあなたは非常に親しいといわれていますね。田中さん自身がそういつている。あの人と気が合うんですか。

大平 （すわりなおして、口をすぼめて）そう、気が合うんですね。（目をつぶって）田中君とわたしとは、性格が大変違うんですが……。

三鬼 そう、違いますね。

大平 （目を開いて）大変異質な存在ですわな。（手をゆっくり回して）それでいて、人間的によくウマが合うというか……わたしの持っていないものを、彼は持っているんですよ。

三鬼 逆にいえば、あちらの持っていないものを、あなたがたくさん持っている……。

大平 そういうことが（笑いながら）いえるかもしれん。まあ、そういうところで、私は人間としても、政治家としても、田中君を大変尊敬もし、評価もしていますね。しかし、わたしと田中君との関係は、君、僕の人間関係（片手を回しながら）でして、（目をつぶって）これを政治的に、一種の色メガネで……つまり、政治的に便宜であるから結ばれておる関係とみられることは、非常に心外なんです。お互いに、ふつつの平凡な人間のつきあいなんですよ。

三鬼 あなたと田中さんが親しくなった動機というのはなんですか。

大平 （目を開いて）よくわからんですが（腕をたたきながら）いつとはなしに仲よくなったんですね。

三鬼 いろいろ話をしてる間に？

大平 ええ。彼とのつながりは政治をやめてもつづけていくつもりでありますかね。

三鬼 私は社長論とか後継者論をよく書くんですが、社長と次の社長の年齢の差は、だいたい八歳というのが、私の原則なんです。だから、社長が次の人に譲る場合には、自分より八つないし十歳くらい年下のものに譲れと……。これが私の長い経験からでた一つの原則なんですよ。

大平 (笑って耳を傾けている)

三鬼 そうすると、明治四十三年に大平正芳さんが生まれ、大正七年に田中角栄さんが生まれている。私のいう原則にちょうど合つんですよ。

大平 (大きく笑う)

三鬼 それともう一つ、異質の人が社長になるべきだということもあるんですな。私は経済記者ですから、会社にたとえると、佐藤株式会社で、仮にあなたが次の社長になると、田中副社長。大平社長がやめて会長になると、田中社長が生まれる……。非常に理想的な姿なんですがね。

大平 それは……(ハイライトに手を伸ばしながら)生理的な年齢からいえばそうですけど、政治的な年齢、キャリアからいうと、田中君が僕より数年先に代議士になっていきますね。それから、政治的な能力からいくと、私は彼に、はるかにおよばないんです。いまの三鬼さんのお説は(口をいっただんへの字に結んでから)田中君が私より先んずるという意味にもとれますわね。政治的にいうと……。

三鬼 経歴はね。しかし、私は年齢を非常に重んじるころがあるんです。ま、それはそうと、あなたと田中さんが合うというのは、政治理念という点でも合つということがあるんじゃないしょう。

大平 私はね……政治家の一つの大事な要素は文学的というかな……(タバコを口元へ持っていつて、吸わずにしばらく考えて)詩とか小説とか、そういうものがわかる、あるいは……(タバコを吸って、ひたいに手をやって、しばし言葉を搜す。目をつぶって)法律とか経済とかいうようなもので

一つのまとまりをつける以前の、こんとんたる人間の情感あるいは人間関係、そういったものに対する、非常に彫りの深い理解というか、そういうふうなものがないと（目をあけて）いかんと思うんですよ。

三鬼 ええ、ええ。

大平 そういう意味では、田中君は相当なものです。文学者とまではいわんけれども、なかなか文学的センスがあるんですよ。私なんかはそういう点はどうも鈍いほうでね。（大きく笑う）

三鬼 しかし、ここに、ずいぶん文学書があるじゃないですか。（大平事務所の書棚には、明治、大正、昭和三代にわたる日本文学の代表作の初版本が、ズラリと並んでいる）

大平 私は、いまからそういうことを心がげにゃいかんなと思って、六十の発心をやるところで……。（笑い）

三鬼 へえ、そうですね。しかし、田中さんは非常におもしろい人ですね。

大平 おもしろい。おもしろいけど、権力亡者じゃないですよ。権力には比較的淡泊ですよ。

三鬼 非常に誤解されている面があるんですね。

大平 ええ、そういう面がありますよ。でも、そういう人じゃあないですね。

国民が望む // 目標達成型 //

三鬼 大平さん、こんど宏池会の責任者におなりになってお忙しいと思いますが、前尾（繁三郎）さんのあとを引き受けるといことは、相当の覚悟があったと思うんですがね。どうなんですか。

大平 そう……（身を起こして、足を組んでからおもむろに）そんなに改まった覚悟とかね（ニコツと笑って）かまえとかいうようなものではないんです。この集団、だれかが世話せにゃいけないし、私にやったらどうだということですから、非力だけでも、やってみましようということだけでね。特別に大きく、武者ぶるいをしておるつもりはないんです。（首をひねる）

三鬼 宏池会とか、何々会とか、こういう派閥的な会合はもたなければならんもんですか。

大平（目をカツとあけて）もたなければならんというのは……？

三鬼 前尾さんがおやめになる。この機会に解散しようということにはならんのですか。

大平 それも一つの道だと思えます。解散するか、だれかが代わってやるかということの選択に直面して（指を動かして）みんな、まあ、やっぱりつけようじゃないかということになった。それだけのことで、とりたてていっほどのことはないと思っただけとね。（口をへんの字に結んで）うん。

三鬼 宏池会といえば、佐藤派に次ぐ党内第二の大派閥ですわね。メンバーはいま何人ですか。

大平 衆参両院あわせて六十六人ですか。

三鬼 池田（勇人）さんのころとくらへるとどうですか。

大平 まあ、だいたい同数と思って間違いないですね。

三鬼 それから、この前の知事選挙ですわ。東京で負け、大阪で負け、保守政党のある意味での危機だと思っんですが、こういうことへの大平さんのお考え、あるいは、自民党をどういう形に改善しなきゃならないかという点について、どうですか。

大平（腕を組んで目をつぶったまま）世の中が体制安定型というか、構造安定型というか、まあ、自民党というものがそんなりにりっぱなもんとも思わんけれども、自民党に任せておいたら（声をあげ

て)大きな悔いはなかるつよ、という意味の一つの安定したものが日本の社会に、これまでは曲がりなりにもあつたんじゃないか……。

三鬼 そうですね。

大平 それで(一語一語ゆっくりと)自民党もそういう遺産のうえで、在来のやり口でやっとならば、まあ、どうにかやっていけるんだという、安易な考えになじんでおつた。いまなお、それから脱却できてるとは、私、思いませんよ。しかし、それが一角から、なんかくずれかけてきたように思う。国民は構造安定型の志向ではなくて、ちゃんとした目標を出せとか、ちゃんとした答えを出せとか目標達成型というか(組んでいた手を広げて)そういうことを求めておるんじゃないでしょうか。

三鬼 もっと具体的なものをね。

大平 問題が非常に緊張を増してきただけに(また、手を組み合わせて)自民党のいままでのやり口がどうもなまぬるい、かつかさうよう隔靴搔痒の感があるというような(左手をぱつと広げて)そのもの足りなさ、不満というものが、こんどの選挙を通じまして出てきたんじゃないかと。それじゃ、こんどの選挙を通じて、共産党がある程度票を伸ばした、それをどう評価するかということ……共産党はそういうものに対して、十分、柔軟な対応力、処方箋をもっておるかというのと、もっていないんですね。(セビロのすそをつまんで、それを見ながら)もっていないんだが、何か、いまの不満に火をつけてそれをあおつた。あおつて人目を惹いた。

三鬼 非常な飛躍をしましたね。

大平 ええ、そういうようなやり口に対して、国民が相当強く印象づけられた。こういうムードのなかで、なんとなく、そちらのほうに票が流れる。それでは共産党がいい政党であるとか……(あこ

をぐっとあげて）そういう票が共産党に定着したとかいうと、わたしはそうは思いませんけどね。だから、これから一番大事なことは、他の政党うんぬんの問題よりは、（にこやかな顔になって）自民党自体が、いままでのやり方から（目をあけて）一べん脱皮した出方をしないといけないんじゃないですかね。

三鬼 若い一年生議員の造反というのが、このごろよく話題になりますね。わたしは、会社だったら社長がよほどしつかりしないとイケない事態だと思っんですがね。

大平 （かぶせるように）仰せのとおりだと思いますね、うん。

三鬼 この佐藤株式会社は、いま、副社長がいなくて、専務が四、五人いる会社だと思えますがね。（笑い）あなたも、もちろんその専務の一人なんだが、ふつうの会社だと、社長のほかに、会長、相談役というのがありますわね。その点、いまの佐藤さんほど、一人の社長がいられる時代はないと思うんですよ。そういう意味で、いい副社長がいなけりゃならないし、副社長がいなければ、四、五人の専務が派閥を超越して、ここで何かしなきゃならない時期だと思っんです。

大平 （いままで聞いている間に答えを整理していたように、即座に）まず、派閥を超越して、自民党のこと、国のことをそういう次元で考えなきゃならないことは仰せのとおりだと思いますね。それではどうするかということですが、わたしは、佐藤さんというかた、仰せのように前後に人がないものだから、あれ見て、大変孤独だろうと思えますし……。

三鬼 孤独ですね。

大平 一人で大変苦吟をされてると思いますが、賢明なからだから、そういったことに気がつかない人でもないと思いますね。したがって、（うなずきながら）佐藤さん自体がお考えになっておられる

ことと思いますね。ただ、われわれ、補佐せにやらん立場におるものは、それをどういうふうによつていくのがいいかということ（しばらく、じつと目をつぶって）佐藤さんのお考え、佐藤さんの今後の出方をみたうえで考えにやいかんことだと思ひます。

岡焼きするな米中問題

三鬼 中国問題ですが、私たちが見ていまして、自民党はうまいなあという感じもするんですよ。ワシントンが中国を承認した一分あとに、日本もすぐ承認するといふ人もいるんですが、中国問題について、もう少しはっきりした積極的な態度といふものをとれないもんですか。

大平 （タバコをくゆらせて、じつと聞いていて）うーん……その……大変大きな問題だということですね、日本にとって。アメリカにとっての中国、ヨーロッパにとっての中国などと違って、日本にとっての中国というのは大変大きな問題なんです。それだけに、巨鯨を前にして、これにどう対処するかについて、これでいいんだという、はっきりとした結論がまだ出ていない。そのことを、僕はそんなに悪い状態とは思わんのですよ。（あごを引いて）手っとり早く、手きわよく処理するといふには、ちよつと問題がでかすぎると思ひますから。

三鬼 そうすると、いまの佐藤総理の悩みといふのは相当わかるわけですか。

大平 わかります。（目をつぶって）政府も、そついつ問題だけに、世界に対しても、国内に対しても、日本のやることはわかるじゃないか、といふ一つの名分をちゃんと踏まえてやらなはいけない。ムードだけではいけない。理屈だけでもいけない。けれども、ようやくこの中国問題といふのが昨年

あたりから、少しテンボが早くなってきた。そういう大問題だから（目をあけて）、まあ、ゆっくりやるんだといって、いつまでもイスに尻を深くおろして、いっこうに動かんというのも、いかがかという感じですね。そこで、アメリカがまず動きかけましたわね。動きかけたけれども、これをそう、岡焼きおやきをする必要はないと思うんです。もともと、アメリカのアジア政策というのは中国中心であったんですから。アメリカのアジア政策が、アメリカから日本にきて、日本を媒体にしてやってもらいたいというのは日本人の勝手ですよ。（すわりなおして）そんなことは、私は思いあがりだと思っね。（腕を組んで）米中間が動きかけたということは、米中の問題として、なにも岡焼きをする必要はない。それを冷静に見るべきだと思う。先になるとか、後になるとかいう問題は本質論じゃないと思います。（やさしい顔になって）問題は、われわれが国内的にも、また世界に向かっても、わかるじゃないかという踏み台は何かということ、日本人自身がちゃんと固めてかかるということに専念すべきで、外まわりのことをあんまり気にする必要はないんじゃないかと思ひます。少し、全体の世界史の車輪が速く回りかけただけに……。

三鬼 ええ、速く回ってますな。

大平 ちよっと、いま浮き足立ってますけど、そればかりでもいかんと思っんです。（顔をくしゃくしゃにして笑う）

三鬼 それから、円の切り上げ問題。これはどうですか。

大平 日本の立場からいったら、切り上げるべからずですね。

三鬼 それはどういふことですか。

大平 まず、円というものが自立的な貿易通貨として力をつけてこなければならん。為替管理だ、

貿易管理だということで保護している通貨だし、まだ、円建ての取り引きはほとんどない状態ではないですか。(ニッコリ笑って)ただ、本来からいうと、いま、われわれがやることは、円自体をもっ少しちゃんとした貿易通貨にまで育てあげることが、前向きな課題のように思います。

三鬼 いまの三百六十円という形ですか。

大平 ええ。(目をつぶって)ところが、切り上げ論というような問題になってくると、この前のマルクの切り上げにしても、西独はやりたくなかったけれども(むずかしい顔になって)やらざるを得なかったのではないだろうか。こんども、西独はやむを得ずああいう措置をとりました。これも西独としては大変迷惑なことなんでしょうね。

三鬼 それと同じように、日本だってやりたくはないと……。

大平 やりたくはないですね。僕は、つまり、一つの国際金融上の課題として……学問上の問題として、これはどうだといわれたら、切り上げるべきでないということになると思います。

三鬼 実際はやらざるを得なくなる？

大平 ええ。現実の政治というものは、そんなぐあいに、日本のつこうのいいようにだけ動いてくれないから、大変やつかしい局面になってきたなという感じですね。

三鬼 いま、自由化の問題が、いよいよ大詰めにきているんですがね。あなたは通産大臣をやられ、政調会長をやられて、日本の経済というものを大きな目で見ていらっしゃるんですが、もう相当自由化にして、欧米諸国と競争して、日本の産業全体としては大丈夫だという感じですか。

大平 (目をこすって)僕はそう思いませんね。

三鬼 思いませんか、まだ弱いですか。

大平 技術が大変弱いですね。それから、体質的に弱いです。欧米、とりわけアメリカと比較した場合に、相当な劣勢ですよ。しかし、その問題と自由化は、わたしはちょっと違つと思つんです。

三鬼 ええ、違いますね。

大平 弱いから保護しようとか、あるいは弱いから嵐の中に立たせると、そうしないとモノにならんんじゃないとか、いろいろありますからね。自由化の問題を考える場合に、弱いから、もう少し保護をつづけていかなきゃならんという発想は、よほど考えておかないといかんと思いますがね。ただ、これで国際的にも大丈夫、大手振っていけるんだというほど日本の経済は強くないですよ。

三鬼 造船とか一部のものを除いて。

大平 技術貿易なんかをみますと、アメリカなんか、いま、ドルが大変弱い、弱いといつてますけど、技術にいたつては二十億ドルぐらいの輸出力をもっています。日本はせいぜい三千〜四千万ドルですよ。それから、企業の規模、企業の体質、それはもう問題にならんぐらい弱いですからね。だから（口をへの字に結んで）こんなことで世界に大手振って歩けるなどと思つてたら（顔をほころばせて）大間違いだと思います。

三鬼 ところで、話は変わりますが、あなたには女性ファンが多いそうですね。

大平 女性？……年増じゃないですか。（笑い）

三鬼 美男子じゃないほうがもてる。これが僕の持論ですがね。（笑い）

大平 （笑つて）若い女性ファンはそんなにいないですがね。私の選挙区（香川県三区）で、そうですね、五十がらみの婦人層は、わたしの支持者が多いなあ。

三鬼 女性票がどれくらいというのはわかるんですか。

大平（即座に）わかりません。（笑い）わからんけども、女性の票は、わたしは相当ちようだいしていると思いますね、うん。（口をへる字に曲げる）

三鬼 趣味はゴルフですか。

大平 いまやっているのは、ゴルフだけです。無趣味なほうですから……。

三鬼 ハンディはいくつですか。

大平 17。17のなかでは、少し強いほうです。